

祝復刊『伊那』60周年

昭和13年12月(第108号)

戦前の『伊那』をめぐって

昭和14年1月(第109号)から7月、10月(第118号)から12月(第120号)、

山村書院山村正夫氏の長男光司さんより、父の遺品として所持していた戦前の『伊那』を恵贈していただいた。

昭和15年2月(第122号)から7月(第127号)、9月(第129号)から12月(第133号)、

現在、一般社団法人南信州地域資料センターで保管している。寄贈された『伊那』は下記の通りである。

昭和16年1月(第135号)、2月(第137号)、4月(第141号)、5月(第143号)、6月(第145号)



山村光司氏から寄贈された戦前の郷土誌『伊那』(S.13~17)

下段中央には表紙2色刷りになり、中身も

号、7月(第146号)、

昭和17年8月(第166号)から9月(第168号)

昭和18年1月(第177号)、3月(第179号)、6月(第183号)

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

寄贈いただいた『伊那』には次号製作のためのゲラ見本として、朱筆を入れたものもあるが、これと、原田望氏(三代目『伊那』主幹)が自身の所蔵本と飯田中央図書館蔵の『伊那』をもとに作られたデータファイル「『伊那』総目録・戦前版」索引をもとに、戦前の『伊那』の書誌的周辺を洗っておきたい。

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

って創刊された『はたの友』が、翌13年11月には郷土研究雑誌『伊那』と改題された雑誌である。

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

その約2年後、昭和15年9月に山村書院山村正夫が「伊那」のその経営を引き継ぐが、昭和17年6月号では再び「休刊宣言」がある。その後も下伊那教育会歴史部によって刊行は継続し、山村正夫が腸チフスで急逝(昭和19年6月没)を受けるように、その年の10月突然の休刊に入る。寄贈された『伊那』は山村書院が林榮から経営を引き継いだ直後から、「休刊宣言」のされる頃までがほぼカバーされていることとなる。

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

『伊那』の経営が山村書店に引き継がれる以前から、誌上にはたびたび山村書院発行の「伊那郷土文庫」など刊行予定も含めた一連の出版目録が表紙を飾ることもあり、昭和14年10月(118号)では、「風越山房小話」と題する編集後記で、林榮は「山村正夫君」という小見出しで、以下のように書いている。

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

「自分は山村正夫君を褒めても後悔はしな」と思ふ。山村君は人も知る山村書院の主人であり、郷土出版で其の名が中央にも響いてゐるのである。郷土史家として有名であり自分もその人格を日頃敬慕してゐる市村威人氏の著書が悉く山村の出版であり其のことは山村君も光榮としてよいであらうしそれは即ち山村正夫君の人格を説明するに足る事実である。

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

自分が山村君を知ったのは小林郊人氏を通じてであった。小林氏が『後藤三右衛門傳』を出版されたとき自分も多少夫れに関与しそれ以来山村君とは度々面会もしその人物が好きになった。『懸引のない正直な人である』『あまり儲をとらない人である』『中々仕事に熱心な人である』といふ感じを次々に受け、それが今も君に対する好感情として残つてゐるのである。地方出版の困難な事は茲に私が説明する迄もなく識者は既に経験を持たれ御承知の事と思ふ。第一に困難な事は読者が限られてゐることである、何れも地方にも郷土出版が殆ど出来ないのに、下伊那のみ多く多数の出版が出来るのは、実に山村君の献身的努力によるもので、世のありふれた打算を先ず念とする商人では手をつけら

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」

昭和19年2月(第194号)「西尾実先生指導国語教育特集号」



林 榮 (『信州飯田紬綹帖』)

昭和12年11月、飯田紬の製造販売をしていた商家若松屋の林榮によ

昭和12年11月、飯田紬の製造販売をしていた商家若松屋の林榮によ

れない所である。さういふ意味で地方の郷土史家等は山村君に感謝してゐる。山村君はさういふ公益の仕事をするので、さういふ点は例へば清節を重んぢ清貧を重んぢてゐる政治家と少しも変わりがない。識者はどうか彼に一層気込んで仕事が出来るとやうに彼の本を買つて遣つて欲しい。読まぬ本でもよい本を買ふことによつて彼を応援して欲しい。しかし一面にはつまらぬものは出版させぬやうに注意して戴きたい。(中略)山村によい本を作らせて夫れを永く残すことが伊那文化の爲めになる何よりよい事であるといふ意味から山村君を茲に紹介する次第である」。

人著『後藤三右衛門傳』を介して、林は山村に知り合い、その半年後、このような肝胆相照らす如き紹介を自分の雑誌に載せているのである。そこには、郷土出版をめぐる、よき編集者であり出版者だった山村と、その業の困難を理解する学者や同業者、いわば志を同じくするものの、よき関係が見てとれる。翌11月(119号)の『伊那』には、小林郊人が「伊那の文化」として、飯田図書館主催の「伊那文化展陳列」の明治以降当地で出版された書籍・新聞の紹介を載せている。玉石混淆の観もあるが、すでに散逸してしまつた資料も多々ある。これら地域の基本文献程度は、図書館で最低保管整理しておいてほしいものだと願わざるを得ない。

六銭 郵税共 切手代用一割増」で振替送金は「名古屋一七九四〇番林榮名儀」で在り、発行編輯兼印刷人 林榮／発行所 伊那文化研究社／印刷所 熊谷印刷所」との記載がある。執筆者は、市村威人はじめ、大沢和夫・平沢清人・正木敬二・小林郊人・村沢多計夫(武夫)・山田居麓・伊藤松古・言哉林榮・和地清・前澤博人・牧内武司・烏寒三郎などの名前が確認できる。

2 『伊那』の変化と山村書院の経営

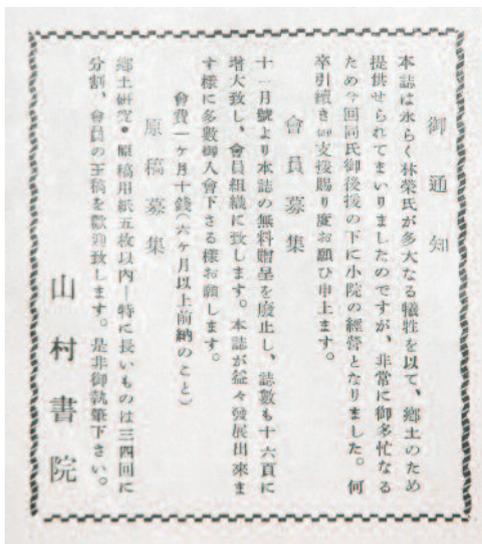
昭和2年京都の業界紙に「日本一の賃織屋」として紹介され、一世を風靡した織物工場若松屋、その余剰の産物としての『はたの友』であり『伊那』であったが、時勢には抗えない。昭和15年4月(124号)には、実母の死に

対する弔意への挨拶と共に以下のような、林榮の弱音が書かれて

きている様子が推察される。

「母の葬式や旁々で、本月は雑誌の事などを考へてゐる余裕もなかつたが、幸いに同人諸君の御力で滞りなく発行出来たことを謹んで感謝いたします。／紙の不足などからして、雑誌の経営も中々難関に立つてゐるのですが、熱心な御後援に依えて少なくとも後退することのない様にいたしたいと存じます。(後略)」

とあり、徐々に戦時下の物資不足が影響して愈々内容を整備拡充して邦家のため一層何か



『伊那』129号(昭和16年9月)

の御役に立ちたいと念願して来たのでありますが、その経営上には微力な私には思ふに任せず、之亦篤志家の御恵投を蒙りなどして漸く今日までですんで来ました。／つきましては今回山村正夫君に相談して今後の経営一切をあげて山村君にお願ひすることに致しました。山村君は皆様も御承知の通り郷土出版社の山村君であつて、本県郷土史界に大切な存在であり、又我下伊那に市村先生を始めとして先輩新進の権威者を多数出したことも其の著書の出版に山村君の隠れた努力のあつたことを忘れてはならないと思ふ位である。その山村君が一切やつて呉れるといふのだから快く委せることにした。勿論私の本誌に対する希望を継いで私の希望を曲げないで遣つて呉れるといふのだから、

その点も私は大に意を安じてをられる次第であります」とある。

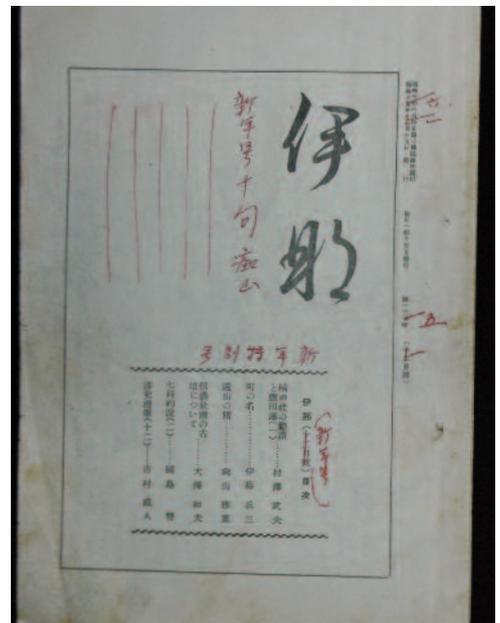
山村書院が引き継ぐと、無料贈呈を廃し、会費（購読料）も写真版や頁数が16頁に増えるのと引替に「一ヶ月十銭」と大幅な値上げをせざるを得なかった。また送金先も「振替長野六二〇八番山村書院（伊那文化研究会）」となる。

さらに特記すべきは印刷所の変更である。これまでは「上飯田四二七五 熊谷印刷所」だったが、10月以降は「上飯田四六五五 南信印刷所」になっている。これは長年山村書院の印刷物を担当してきた原田増蔵の研究社が戦時体制下で猶興社と合併して南信印刷（原田は専務に就任）となっていたためで、工場は研究社時代の場所そのまま営業を続けていた。山村は心を許した

原田に当然のように『伊那』の印刷も委せたのである。これが、原田家三代にわたる郷土誌『伊那』の出会いになった。

また奥付には「発行兼編集者に林榮」の名前がある（戦前の『伊那』は林榮が携わらなくなっても登記上の関係なのか、敬慕の念からか林の名前を残している）ものの「後記」は林に代わって山村が書いている。その後記には「本誌も未だ毎號にて発行者林榮氏と私の隔月の負担によって発行してゐます。本誌によつて一銭の利益を得ようとは思ひませんが一杯位に行ける様にしたと思ひます」と、苦しい台所事情を綴っている。

しかし、経営移管後半年は「月1回15日発行」と表紙に印刷されていたが、昭和16年4月號（141號）から「毎



『伊那』135號（昭和16年1月）

月二回一日十五日発行」となるが、これについては、15年11月（131號）巻末に括弧書きに（お断り 第三種郵便物の規定により会員組織の一部を変更いたしました）の添え書きがあるが、具体的なこと記述はない。そして、不思議なことに、この12月（133號）から通巻の號数が1つ飛ばしになる。

本来であれば132號のところ、133號となっている。正月號製作のために、前號ゲラに見本として「第一三三號號」の一の

位の「三」を「五」に1つ飛ばしに指定した山村の書き込んだゲラが残されている。これは誤謬ではなく意識的なものである。

原田望氏が仄聞しているところでは、「当時父親が当時発刊していた『組合製糸研究』（大正9年創刊）と通巻の號数を割り振ったと聞いたような気がする」というが、第三種郵便許可の発行物がそうしたことができたのか、はなはだ不明である。「毎月二回一日十五日発行」の表記は廃刊にな

る昭和19年3月（195號）まで続いている。通巻號数の表記は1つ飛ばしだが、冊子の頁数は通巻表記を意図して29頁で終えた1月號を受けて2月號は30頁から始まるという具合である。

また、表紙は以前は目次だけだったものが、松尾多勢子の肖像や菱田春草の日本画、古文書など地域史に関連した写真や図版を掲げるようになり、ビジュアルに訴えるものになっている。さらに増頁を受けてだろが表4（裏表紙）は全面広告で、若松屋と山村書院、時に県外の出版社の広告が入るようになった。

この頃の執筆陣は、前述の人々に加え、北原痴山・向山雅重・福島豊・日下部新一・伊藤兵三・竹村浪の人・林和男・代田豊太郎・宮下操・伊藤傳・有賀喜左衛門・片山勝・小

泉一三・後沢重雄・武田彦左衛門・入交好脩・新納忠之介・河竹繁俊・鹽澤多嘉示・平澤里子・後藤俊三・下條山人ら、山村の交友を取り込む形で幅広くなっている。

3 山村の急逝と下伊那教育会との関係

昭和17年になると表紙が二色刷りになり、紙が二色刷りになり、執筆者も増え、さらに、コート紙の写真版口絵が増え、表紙の図版が口絵に移され、その解説がつけられるようになった。

しかし、こうした無理が災いしたのか、この年の『伊那』3月（159號）に次のような「謹告」が載った。「本誌のため御期待と御支援下さいました読者諸賢又御執筆者に対し申訳ないことでありまして、が色々の都合上六月號を以って休刊致すこと

になりました。それで四、五、六月號の合冊特輯を五月上旬発行し終刊號と致します。(後略)とする休刊(終刊)宣言が掲載される。ここでいう「色々の都合」は、四五月合冊特集號となった第163號に1頁をとった謹告で山村自らが次のように匂わせている。「前號にて本誌の休刊を申し上げました処多数の読者諸賢より「休刊は惜しい何とかならないか」と熱烈なる御言葉や御書面を頂き何とも恐縮の次第でありました。本誌は御承知の通り林榮氏発行のものも同氏の御依頼と御援助により経営一切を御引受け致したのであります。元より営利など考へず郷土認識の機関に精神力培養に郷土文化のため多少なり共お役に立てばと微力乍らも努力して参りましたが、今や皇軍の大戦果に伴ひ国内

体制の整備拡充に新文化の建設にと国民総力の時に当り、何等教養なき文盲の私に取って責任重く又時間の余裕と経済的の關係上完全なるもの出来難く色々悩まれし結果御期待されし林榮様及皆様に対して申訳なくも休刊を申上げたのであります」とあり、戦時下の不如意に加え「時間の余裕と経済的の關係上」断念したことが推察される。

が、しかし、『伊那』の果たして来た役割は多くの心ある人の胸を打ったに相違ない。なにかんづく市村咸人をいただく下伊那教育会が救いの手を差し伸べた。先の「謹告」は次のように続く。「今回幸ひにも下伊那教育会其他の有志の方々によって本誌をこのまゝ、継続御引受け下さることになりました。下記の通り郷土研究家の諸氏によつて編輯発行されることは誠に喜ばしい限りです。以上の如く本號を以つて小院よりの発行を打切ります故何卒御諒承御願ひします。終りに特に御支援下さいました市村咸人先生始め其他の諸先生及び読者各位に対し謹んで御礼申上げます」とする山村の挨拶の告げるように、以降のの編輯を下伊那教育会歴史部が担うことになり、事務局が下伊那教育会館内におかれた。これを購読会員を「伊那郷土史学会」とした組織化も進み、『伊那』は月1回発行される機関誌と位置づけられ、表3(裏表紙裏)には、その規約を掲げるている。こうした組織化に関して

は史学会代表でもある市村咸人の影響力が大きかったと思われる。山村は完全に退いてしまったのではなく、13人の同人のひとりとして残っている。昭和18年になると物資の統制でいよいよ苦しくなっていくが、組織化が成功したのか、史学会の会員は3月號136人、4月號154人、6月號175人と、教員を中心に一月に数十人ずつ増えていった。

そんな中、同年6月30日発行の『伊那』6月183號に山村正夫が6月29日37歳で逝去した旨のその訃報が掲載された。今回、上掲の『伊那』を寄贈いただいた山村正夫の嗣子光司さんはこの時国民学校の五年生だった。

ここで少しく原田増蔵(島村)を追つてみよう。『島村翁の米寿を祝う』(非売品・昭和57年)の坂下廣士の寄稿によれば、大正12年2月当時、島村は「南信」町政記者のかたわら「組合製糸研究」と、女工対象の「日々のあゆみ」という月刊雑誌を発行していた。これが縁で、南信主筆池田愛泥に認められ、「南信」記者として働くようになったらしい。当時の住居は中央通り(中荒町)の飯田電話局下の曲がり角にあった町役場に続く西口の小路を約40メートル位入った所の格子造りの家、その後、自ら印刷することを考え昭和4年春に鈴加町に移転して研究社印刷所を創立し、その後、昭和16年には株式会社南信印刷に発展した、とあり、昭和16年に一つの転機があったらしいことをうかがわせる。この年は奇しくも山村正夫が『伊那』を引き受けた翌年にあたる。同じ『島村翁の米寿を祝う』に寄せた日下部新一の文章にも「昭和4年に印刷所研究社を創設した。印刷所経営と雑誌刊行と併続し、最盛期には印刷所従業員も二十名を超す程となり、山村書院刊行の郷土出版物は一手に引き受けて印刷した。だが太平洋戦争に突入すると、印刷用紙が不足を来たし昭和十七年遂に廃業のやむなきに至り一介の浪人となつてしまった。／敗戦後南信時事新聞の記者となり、僅かの給料に不足勝ちの日々を送っている時、市村咸人・福島豊両氏の奨めにより郷土研究誌『伊那』刊行を決意した。「伊那」は先に山村書院に続いて教育会歴史部で刊行していたが用紙配給が

断たれて廃刊となっていたものである」との指摘がある。

また、この間事情を、同書『島村翁の米寿を祝う』に添えられた「原田島村翁略年譜」にみれば、島村は伊賀良小学校高等科4年を卒業後、松尾・鼎・大鹿などの組合製糸工場につとめる傍ら「中学講義録」等勉学を続け、大正3年に田口イサと結婚（二男三女をもうける）、大正6年に南信に投稿した論文が縁となり通信員となる一方で、大正9年9月『組合製糸研究』を創刊し、大正10年、鼎村から飯田中荒町関島氏の借家に移転している。坂下氏の記憶は、この時分のものである。その後、大正13年妻イサの死去、昭和2年佐々木貞と再婚、三男真（二代島村）、以後四女、計五男五女をもうける。昭和7年研究社を興し

吾妻町に転居、15年には中原謹司の猶興社と合併して南信印刷として、専務に就任した。

一方で、飯田町の印刷業界の記録によれば、昭和10年17社でつくられた飯田の印刷組合では副組合長を務めているが、国家総動員法で紙もまた配給になり、昭和14年以降既述のように配給紙の不足ができてきたらしく、業界の昭和16年頃の業界の統合では「南信印刷」の看板下「原田の工場」として業務を続けていた（原田望氏談）が、昭和18年暮れの業界再編成、すなわち「自発的な転廃業を募り、次に売上高・用紙の使用量、地理的配置を調査し、組合内申も加味して、県の組合と担当官庁が検討して、同年11月28日に、赤穂町に南信地区の全業者を集めて、県・組合の係員が来て、継続する業者が

発表された」とするが、その中に「南信印刷」の名前は見あたらない。

先の「略年譜」には「昭和18年『組合製紙研究』は官の命令で廃刊した」と、ライフワークだった『組合製糸研究』を止めねばならなかった悔しさをにじませる、簡単な一文で廃業を記している。

と同時に、山村正夫没後も下伊那教育会歴史部の手によって細々と続けられていた『伊那』の出版も3月『肥後和男先生講演会特集号』を最後となった。

（嶋）